

# 工

チオピアという国は、コーヒー発祥の地として知られている。言いならわされているところによると、自生していたある植物の実を食べたヤギが異様に興奮しているのを見た村人が、その実を食べてみたところ、眠気がとれて、活力がわいてくるのを感じたという。そこに目をつけたのが、イスラムの修行者たちだった。彼らはこの実を煎じた汁を飲むことで、眠気を感じることなく祈りに集中できた。こうしてコーヒーはエチオピアからアラビアへと広がっていったといわれている。

## 旅の曲者

46

### チャットしませんか

文・写真／田中真知

イラスト／bozen

ラと呼ばれるが、同じものを指す。

だが、チャットとは野菜なのか。市場で売られているものを見ると、ほうれん草のような葉野菜の一種のように見えなくもない。生食用であり、ときにアフリカン・サラダと呼ばれることもあるので、野菜でないとはいえない。しかし、その用途は食用というより嗜好品に近い。チャット(学名 *Catha edulis*)には穏やかな麻薬性の成分がふくまれており、その葉を口にふくんで噛みつぶ

チャットを噛んでいると、コーヒーと同じように眠気が覚め、頭がスツキリしてくると、エチオピアの人们たちはいう。このため、夜中じゅう運転しなくてはならない長距離自動車のドライバーや、試験を控えた学生なども、ごくふつうにチャットを愛用している。

コーヒーと同じく、チャットも、イスラム教徒が祈りに集中するために使い始めたといわれている。ただし、同じエチオピア起源のコーヒーが17世紀頃、ヨーロッパにもたらさ

またコーヒーカップを口元に運ぶような優雅さとは程遠いばかりか、一度口に入れたら何十分、ときに何時間も噛みつぶけなくてはならないので、口の中は緑に染まる。そんな見目の悪さも、チャットがヨーロッパに普及しなかった要因かもしれない。

今日でも、コーヒーはエチオピアの代表的な輸出品であり、外貨を得るための重要な手段である。ところが、このコーヒーとともに、エチオピアの重要な外貨収入源になっている風変わりな農産物がある。それがチャットである。

チャットといっても、パソコンのチャットではない。日本ではまったくといってよいほどなじみがないが、エチオピアやその周辺のソマリア、さらに南アラビアのイエメンなどでは、知らない人のいないほどポピュラーな農産物である。ちなみに、イエメンではカート、ケニアではミ

けることで、集中力が増したり、眠気が覚めたり、高揚感をもたらす作用があるのだ。

「麻薬性」と聞くと、一瞬どきどきとするが、その作用はマリファナやマジックマッシュルームなどに比べると非常に弱い。強い習慣性や禁断症状もなく、アルコールや煙草などのような健康に対する害も報告されていない。このためエチオピアやイエメンではチャットは合法であり、人びとはコーヒーを飲むように、普段からチャットを噛んでいる。

その後、大流行していったのは対照的に、チャットはヨーロッパには普及せず、北東アフリカとアラビア半島内に普及するにとどまった。その理由は明らかではないが、チャットにはコーヒーのような香り高さもなければ、ファッシュヨナブル性にも欠けている。コーヒーがカップに入れた飲み物という形で供されるのに対して、チャットはその葉をちぎって直接噛む。といっても、ただの葉っぱだから青臭い苦みがあった、けっしておいしいものではない。

しかし、エチオピアやイエメンでは、チャットは急速な普及を見つけた。民族紛争が昔から多かったこの地域では、仲間同士でいっしょにチャットを噛むことが、絆や信頼感を深めるために重要な役割を果たしてきたからである。チャットをいっしょに噛む仲間はたいい決まっております、ふつうの友人関係以上に深い絆で結ばれる場合が多い。結婚式や葬式などについては、チャット仲間がお金を出し合うという互助組織の役割を果たすこともある。チャットはエチオピアやイエメンでは、共同体を支える文化の一部になっているのである。

仲間同士でいっしょにチャットを噛むことはチャット・セセッションといわれる。筆者もエチオピア滞在中、なんだかこのチャット・セセッションに誘われた。チャットの産地であるハラルの伝統的な家には、このチャット・セセッションをする広間がかならずつくられている。セセッションと



いっても、とくに決まりがあるわけではなく、座ったり、寝ころんだり

しながら、それぞれが持ち寄ったチヤットをひたすら噛みながら、とり

エチオピア東部ハラルのチャット市場。やわらかくて若芽の多いものがよいとされる。右の人物が手にしている束は中の上くらいの質のもので、日本円で約300円。

とめもない話をつづけるだけのことである。

チャットを噛みはじめると、初めは興奮して饒舌になりがちである。2時間ほどそんな状態が続くと、ゆるやかに興奮が収まっていき、やがてリラックスした心地よい状態に入る。最後にビールやコーヒーを飲んで、その状態に終止符を打ってチャット・セッションは終わる。1回のセッションで、だいたい4〜5時間かかる。こんなセッションをくりかえしながら、互いの秘密を打ち明け合い、おのずと親睦が深まっていくのである。日本の居酒屋文化に近い気もするが、記憶がなくなったり、酔いつぶれることがないので、その意味では、きわめて健全である。ただ、筆者の場合は、なんだかセッションに参加したものの、いくらチャットを噛んでも口の中が乾くばかりで、ほとんど効かなかった。そのくらい作用が弱いということである。最近になってチャットばかりやっている、若者が働かなくなるとい



## 田中真知

たなか まち

「プロフィール」1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に「アフリカ旅物語（北東部編・中南部編、凱風社）」「ある夜、ピラミッドで」（旅行者）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、「惑星の暗号」（翔泳社）など。

うことで、チャットを罪悪視するよ  
うな意見もエチオピア国内から出て  
きている。たしかにそういう面はあ  
るのだが、一方で、チャットはひじ  
ょうにすぐれた換金作物である。栽  
培が容易なうえ、単価はコーヒーの  
2倍から3倍。高級品になると1束  
（小松菜1束くらい）で数千円にな  
るものもある。最近のコーヒー価格  
の国際的な低迷もあって、コーヒー  
からチャットへと鞍替えする農民は  
年々増加している。輸出先もアラブ  
諸国だけにとどまらず、ソマリア人  
やエチオピア人の移民にともない、  
欧米への輸出量も増えている。ゆく  
ゆくはチャットはエチオピア最大の  
外貨収入源になるであろうという予  
測をする経済学者もいるほどであ  
る。

日本でチャットを栽培している生  
産者はまだいない（と思う）。いま  
なら、日本におけるチャット栽培の  
先駆者になれることまちがいない  
が、どなたか興味のある方はいない  
だろうか。